Shunsho - 1 Vol -

#81

Shi ji yei gin,
Four seasons poetry or Song - Date 1780 -

Bm
£5.5. Nov/01

大海老屋

志ねう

たまきく

あこのつま

涂七ま

秋

一

角大黒屋

美まち

浅ゆき

玉かつら

新かなや

二乃綾

かほる

あさくも

はつ花

き里屋
栄園
みつ花
花き里

花清

いさよ

はしなら

梅の尾

ありさき

丸ゑびや

松葉屋

四ツ目屋
たまの井
勝山

おゐしく
とみやま
糸きく
あづまぢ

大俵屋

おなしく
浦川
花

ほゐや
あがつね
つるとの
すゞくえ

この町

松本じ久

都路

満汐

万太夫

角金屋

たま木

浮舟

今岡

七綾

桐菱屋

志つま久

万菊

かめ菊

玉菊

越前屋
九重
もろこし
花のえ

山城屋
万喜風

丸屋

小野町

うづはし

きく野

小松屋
錦木
若草
三津瀬

大菱屋
み津のは
きちかう
いさわ

大金屋
白妙

大ゑびや
床し衣
一もんじや
松やま
大ゑびや
風折
大ゑびや
ひの町

○

風は身をまかせて遊ぶ柳かな　清花

松風も音なしや藤乃花　吉十戸

浅からぬ人はきらはし柳かな　三孔川

○

鶯や竹の葉のうちを擡しめ　豊涯

折枝ハ風をしらぬの柳かな　小式部

指を折る日数まちくもかな　菊鶴

満き人乃俤ややさし雛まつり　玉鶴

○

春雨やうるほひて流る硯石　志玉

春もく藤のる懐から重ね岌尺艸　魚里

○

きのふは人恋柳れ末ゆかりかな　涼きね

夫と母俤子に人も松風自　瑞山

精しくて人もまちかね藤の絡　志浦

あき清く吾妻の名を読みけり　姉萩

〇

五月雨や新竹玉の寄る里の水　花琴

岩橋乃ちまりや明の深ゝの穴　松山

〇

深き森ちり見をせまれん外　長山

夕ゞ深手花も赤り地の扇ちか　千山

身まうけゝきゝ風のあはじ夜のゆき　雛霍

ぬれても笠きむけよかゝき沢　三よ伯

行名にぬ伊のしめやわや兎草　錦戸

何とも松を明るまも花さ晝外　名山

見る鍋るの鳥ル蕎莚ら外　康之

撫子や雨のあるまの一二輪　豊たる

言枚に入色を別りし夜乃蕣　万さん

〇

みしらぬ秋をさらにかちある枕かな　志つゝ

かすみ経て手をりてきたり鶯の都　梅の香

宿の後みむらつれん深くきゝけり　瀧川

涼しされ水すましかる夜の雨　志ら山

去のふる名のしるかきす扇かな　白きく

○

解やすき縺ゆけるあき露外　神路

風葉かひとつくや丁子風呂　志ら東

夜蛍や秋なつかしき蘇乃艶　いの銭母

きしきやおしてをきあろ寛のろ　志ら雲

若葉や我形形晴やさつ雨　青柳

○

面白さや団扇の綿も京のさく　玉つき

昼寝涼や袖の香袂の色　そのたる

出清す舟やおぼ縁乃夜あひ　白ゝ画

秋之部

たなはたを男す清めさする星迎ひ　玉かつら

みすゝらう洗ひ呉たるにれかな　清らき

かゝ見のきせて恥し葉乃花　花すゞ

○

いろ乃まゝ月またなりまつるかな　忠ひろ

織姫の添しや綿墨の雨　玉菊

咲もしくなまて通ふや稲乃雨　深やま

もろ紙にゐ婦ころびて藤ばかま　玉かつら

徳けたるつむひたくし雨の萩　江のすゑ

見ませ白き萩の白さやおもしろし　常夏

○

宵まちて林桜乃葉あれ哉　江口

地まあらい二挺櫓なりも天の川　立花

まつさきの実も美しき北窓　深さ

気散らす咲く林はに色に帰りかな　綾菜

八朔や華にをくるゝ咲の梅　二のあや

○

京舟にまぎれ秋お床し虫乃聲　とる町

やどりし火に数く夜や笹の虫　是つ花

志ら菊花に孫しくや錦する里　芸川

菜の色をまさきえいろ萩の雲　菜墨

○

荻にとも雲かあしき萩の花　要之友

菊の香せ日保ふ恵ゝ居の一二編　素白

身乃上を康にあづけて三年酒　婦ゝ町

○

定る秋の琴掬る旅ゝ十三秋　芳ふつ

なつきの秋越す川蓑出れ君去し　大さ花

鳥の音もしみはよし暮く里の居　立き

分柝してしばら奥ある杜丹か　何清

鶏声やくわうちあふ蟹る花　田　手之也

菊さへ是清ふや葉の露光ん　定栋

木すりあきく今川むし是菊の色　玉萩

色ある月はりひ林あらり藤に紫　うふ是

○

なるゆあるかめ清しらや我ふ白方　よし言

おのゝ香は偽錦絵原人柿のまき　岩の尾

色月てて秋をさめらふ古柑花　於花さ

灯千本や秋られ銀屏風　菊清る

狭蝶つけて居まゝしゝ秋の秋　いよ照

○

机きぬし菜ゑ手かゝみやおとろに　清乃色

うつろひ夜露の見られしる秋草　花世

松かせ更るむ極や寂く露時雨　すゞ衣

白萩のまゝつんさりり庭の夕　初き花

ひとせの名つくしや菊の舞　風羽

三味線きひしさるれ枕に糸　江ら八

ねりひきや君越かへる雪の海　小萩丸

冬之部

かへ簑の雪こそ柳のすかたかな　七綾

さらけやうらみ静なる窓の雪　岩翠

すゝ尼やまつ勇ほつる雪の宿　今圃

編笠手かよ細目もあさきよの雪　済舟

○

一りんに香纏ふ似まらぬ冬牡丹　みな花津

水仙の履もぬれし川ちどり　三河堂

枯あし我夢さくちれ附鳥かな　象湾

玉すれのちはつらしき氷柱かな　いさく

○

風さそ姫波也我世は友千鳥　喜きく

河ても中すゝ人あり冬の梅　万菊

称来話雪のまゝれや香煙峰　平堂

花と云ふ花たつくんで出れ梅　かめ栄

○

暁の鐘にやゝ浪乃きこえけれ　吉浦

鶯なしきのうつくしさや右勝手　和国

咲清く匂ふしや霜の華　まわ江

冬の日や人れめぐるのふかんさ　云の舟

枝乃なき去る路ゝ月うしろ仙花　ここの丈

○

松の櫻ゝ琴らつむや天野の雪　二六堂

新て咲梅乃木まるも雪の花　半丈

神楽く川かふ雪れ新鶯か　こう浦

いつの間年傘れおりしや雪の道　都路

手ね人手形もれ積るや秋叶雪　万吉丈

をとゞ梅て篁手出るや庭の雪　満しお

すゝ雪や巨鐘のよれ小さゝ哉　会六丈

○

ひらき行の筏浮も白しきさらの雪　秀機

手洗ふに梅がかゝる人むかしかな　志ゆき

夕かけて雲の雨のや山の名も也　松風

○

あたらしき山吹ちるや帰り萩　萬艸

鶯のふるやれや霜枯の枝に来　三月

志ら雲の秋雨ふるや浦松哉　三村

宮の雪の降る雪の千代の春　雪の下庵

折しもの川瀬やかげも岩枕　秋葉

○

人生まし竹の花影や冬の梅　竹の町

うつりぎの香や酒のかざし花　かつきの

夏川や雲も紙子にあらし神香垣　若つる

○

富士消えぬ雪も秋風に雪のかへ歌　白元

和気の香はそく芽し春の梅　春江

名やうんありてもやまふ雲北た　何の声

名やうんありてをやまふ雲れ合

以上

さうぢくへ小人をみじれ夕へハ